

解 説



# 学会誌の意義と課題（その1）

## *Significance and Challenges of Academic Journal (1)*

出版部会編集委員会

参加者：矢野耕也（日本大学）、安藤欣隆（エスケー石鹸）、窪田葉子（日本水環境学会）、坂本雅基（花王）、沢田龍作（サワダ技研）、田口伸（ASI）、中島建夫（元 東京電機大学）、二ノ宮進一（日本工業大学）、吉原均（キヤノン）、細井光夫（コマツ）、常田聡（日精樹脂工業）、江末良太（IHI）、山村英記（東海理化）

編集委員外参加：上杉一夫（上杉技研）、高辻英之（広島県立総合研究所）

### 1. はじめに

矢野 学会誌は、会員と学会組織をつなぐ重要な窓口の一つ。学会員が直接集まっての交換が可能となる研究発表大会は春と秋の年2回であるし、一般の会員にとっては、各地の研究会等の横のつながりは別にして、学会誌が運営側との唯一の接点となる可能性もある。現在はweb等の情報取得ツールもあるが、やはり紙媒体としての重みはあるだろう。

さらに学会の動向把握とは別に、研究成果の発表や学術団体としての対外的な発表といった側面もあり、一般的な学術団体としての成果の発信といった意味もある。最近ではコスト削減などからweb化に移行している学会も多くあるが、今回は編集委員の立場から、改めて論文誌の意義や位置づけ、課題などについて議論をしたい。

現在、品質工学会誌は原著論文と論説あるいは解説を各1編ずつ載せるのに苦労している。学会誌とは直接関係ないが、会員数が最も多かった2007年の2268名に対し、この3月末では1272名となっている。減少も問題であるが、学会も創設して26年目であるから、世代が入れ替わるのもやむを得ないのかも知れないが、学会誌としての課題を現状としての学会誌の問題に関する議論を通して考えたい。

### 2. 原著論文の投稿

矢野：原著論文は、会員が一番多かった2007年あたりには年に50編以上の投稿があったので、毎号6編近い掲載が可能であった。しかしリーマンショックのあたりを境に漸減していき、2016年で8編、2017年で9編と、投稿数が少ない状況になってきているが、学会誌を「季刊」に変更する案は半数の編集委員が反対した。

田口：各地方研究会に年間2編ずつ出すようお願いしたらよい。

上杉：確かに地方研究会を訪問すると、研究事例の検討としていろいろな研究が行われている。

中島：それが大会発表や論文投稿につながっていないということか。それをクリアにしたい。

田口：地方研究会のメンバーには学会員でない人も多い。

吉原：NMS研究会の場合、入会条件は自分のテーマがあること。それを研究会でもんで学会発表するようになると、結果的に品質工学会員になる。それができずに去る者は追わず来るものは拒まず、をNMS研究会のルールとしてやっている。

矢野：大会発表で良かったものや、各種の賞を受賞した会員に論文を出してもらえよう、そのつど依頼している。